〔論文〕

光の子，新渡戸稲造

葛　井　義　憲

名古屋学院大学法学部

要　　旨

「輝かしい経歴」を有す新渡戸稲造が社会の片隅，暗闇に眼をそそぎ，そこでキリストの愛の働きをすすめる姿は奇妙，不釣り合いなもののようにも思われた。明治は「立身出世」をスローガンとし，「栄達」することを人間の幸福だと強く教えてきた。この時流のもとで，日本国家が奨励する「立身出世」を見事に果たし，多くの人々から尊敬され，「世界で輝く」人材として高く評価された稲造は「文明国家」日本の寵児，国民が範とすべきモデルになっていった。しかし，そうした「憧れの存在」の視点と関心は悲哀と苦悩の渦巻く処が「癒され」，そこで生きる人々が希望をもち，勇気をもって歩みだすことを支援するものであった。

こうした地味な活動へと積極的に関わらせる視点・エネルギー，信仰・思想などを「悲哀のキリスト」「クエーカー」「遠友夜学校開設」，また「聖書に綴られたユダヤの民のあり方，イエスの言行」などを用いて分析・考察・執筆した。

キーワード：光の子，遠益の死，遠友夜学校，悲哀のキリスト

A Child of Light, Nitobe Inazou

Yoshinori FUJII

Faculty of Law

Nagoya Gakuin University

発行日　2017 年 2 月 28 日

1. 自由と解放

イエス誕生物語で主要な役割を担った群れの中に羊飼いがいた。ユダヤの民が遊牧者としての歴史を刻み，遊牧生活が自らの生活の基盤だと認識していた彼らにとって，羊飼いは身近な存在，ユダヤ人の生活風景に溶けこんで生きる者たちであった。しかし，この誕生物語が表れるころ，紀元前後，羊飼いは彼らの社会の下層におかれ，蔑視の対象にもなっていた。この蔑視の対象である羊飼いに，天使は「救い主」の誕生を告げたと言う。そしてその「救い主」のこの世で果たす役割をルカによる福音書は 4：18-19 で簡潔に記している。

> 主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために，主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを使わされたのは，捕らわれている人に解放を，目の見えない人に視力の回復を告げ，圧迫されている人を自由にし，主の恵みの年を告げるためである。（ヨハネによる福音書 4：18-19）

これは紀元前 6 世紀，ユダヤの民が大国バビロニアで苦難と不自由の憂き目（「バビロン捕囚」）を見た体験の下から描かれたイザヤ書 61：1-3 を引用したものである。そしてこの箇所には「自由」と「解放」の文字(aphesis)が綴られている。暗闇がバビロン捕囚のユダヤ人を覆い，不安と拘束に慄きつづける彼らに「自由と解放」の知らせが届けられたと，預言者イザヤは伝える。イエス誕生以前より，彼らの世界には「自由と解放の重要性」に気づき，それを具体化しようとする「事実」があった。旧約聖書は「奴隷，土地喪失者」などが「一定期間」ごとに，「自由」と土地の返還を得ることができたと告げる。

モーセに連れられてエジプトを脱出し，神が約束してくれた土地，イスラエルに入る歴史（紀元前 1290－1250 年）をもつ彼らはとりわけ，エジプト滞在時代の「不自由、奴隷生活」を考究し，「この世にある大地は創造主のものだ」と理解していた。それ故，彼らは「50 年」目ごとに祝う「ヨベル（yôbēl, jubilee）の年」をとりわけ，大事な神の意志実現だと認識し，それを心の底から受け入れようとした（レビ記 25 章）。このヨベルはアヘェシス（ギリシャ語）と同じく「自由と解放」を表わすヘブル語である。

ユダヤの精神・歴史・文化を身に着けたイエスはこの「自由と解放」を人々に伝え，もたらす活動を創造主から与えられた自らの使命だとして受け入れた。そして故郷ナザレから始まるイエスの宣教の旅路をアヘェシスの旅と位置づけた（三好迪著『旅空に歩むイエス』講談社，1984 年，125-6 頁）。しかしてひたすら「自由と解放」を告げ，求め，愛の活動に生きたイエスの，この世での最期は十字架上で血を流して死に，天へと戻った。イエスが「いのち」すべてに注いだ愛と癒しと救いの宣教活動はイエスの悲痛・死などをも必要とする壮絶なものであった。

このイエス・キリストに連なる新渡戸稲造も人々と社会に「自由と解放」の訪れを望み，その実現

彼は1891年3月，母校，札幌農学校教授に迎えられた。この年の1月，稲造はクエーカーのメアリー・パターソン・エルキントン(Mary Patterson Elkinton)とフィラデルフィアで結婚した。そして2月に米国・ドイツでの留学生活を終えて帰国した。稲造たちが札幌で過ごす1891年からの生活は希望にあふれた教員生活，愛する妻メアリーとの新婚生活，さらに，農業経済学者としての研究者生活であった。

そして，もう一つ，彼らに喜びを与える出来事がもたらされた。長男，遠益(とおまさ)が1892年1月に札幌で誕生した。これは彼らに神の祝福と恵みと幸福の訪れを実感させるものだっただろう。しかし，長男遠益は誕生後まもなく天へと召された。この長男の早世は彼に大きな「悲しみ」を与えるとともに，この訪れた「悲しみ」の意義を考えさせる機会ともなった。彼は義弟ジョセフ（Joseph Elkinton）に「悲しみ」に関する書簡を1892年4月に送っている。

> ある日私が病床のメアリーの傍らに座っていたとき，ふと心に浮かんだことがありました。ひとつの発見とでも言わせてもらいましょうか。そのことをお話ししましょう。（中略）書斎のストーブの傍らに腰掛けて,寝室でうとうと眠っているメアリーを見守るともなく見守っていますと，突然ある考えが心に浮かびました。苦悩を通してこそ私たちは「天の王国」に入るのだ，キリスト教は苦悩する人類のために「苦悩する救世主」が創りたもうたもので,今も変わらないという，考えです。（『新渡戸稲造全集』第22巻教文館，1986年，429頁，『新渡戸稲造全集』第23巻教文館，1987年，561-2頁）

遠益の死はイエスの悲しみに彩られた宣教活動に強く心を向けさせていった。イエスを主と仰ぐ稲造もメアリーも，人々の痛苦を見つめ，社会にある悲惨，矛盾などを解消するために血を流したイエスの十字架上での姿は遠益の死を越えて，貧しく，厳しい生活を余儀なくされる札幌，日本中に喜びや希望や明日への活力がもたらされるための働きへと駆り立てるものであった。しかも，その活動は「力」を第一とするものでなく，「愛」を基盤とするものであった。つまり，業績，栄誉とは縁遠いものであった。立身出世に心をくだき，名誉や権力獲得に奔走する明治社会の人たちの姿とは相当隔たるものであった。この稲造たちを突き動かすイエスにならう愛の働きは，別言すれば，「馬鹿げた夢」を追う人たちが「道化師の園(a fool’s paradise)」で遊び興じるにすぎないものだと思われたことだろう。しかし，現実の「愛の活動」は十字架上のイエスと同様，「痛苦，悲惨」などを伴うものであった(Rufus M. Jones,The Faith and Practice of the Quakers(Indiana:Friends United Press,1927),168-9)。しかしてそれに応じ，稲造はハッキリと義弟に遠益を亡くした妻の様子を知らせる手紙のなかに，「苦悩を通してこそ私たちは「天の王国」に入るのだ（It is through suffering that we enter the kingdom of Heaven.）」という文章を記している。そこには，クエーカーが重んじる「光の子」としての役割を考究する姿が記されている。

新約聖書，エフェソの信徒への手紙５：８に，「あなたがたは，以前には暗闇でしたが，今は主に結ばれて，光となっています。光の子として歩みなさい（H.H.Brinton,Friends for 300

years(Pensssylvania:Pendle Hill Quakerback,1965),17-8）」と述べられているように，稲造夫妻も「自由と解放」に生きたイエスの弟子として，「光の子」として「苦悩する社会世界」にキリストの光，いのちの光を届ける意義を十分に知らされていった。

2. 札幌での教育活動（遠友夜学校活動）

新渡戸稲造の弟子，半沢洵は 1894（明治 27）年 1 月，稲造たちの暮らす札幌で行われる愛の教育活動の開始と展開を述べている。

> [明治]二十七年一月当時札幌の東部豊平橋の付近にあって信者並に札幌農学校の生徒に依って経営されて居た札幌独立教会付属日曜学校の敷地及び校舎を買取り，貧窮せる家庭の児童並に晩学者を蒐め，夜学校を起し，[新渡戸]博士自ら札幌農学校生徒の有志と共に之が教育に当る事となった。博士の（中略）理想は（中略）異郷の婦人の篤志に依って実現されたのである。この夜学校はやがて，その設立の趣旨に則って，論語の「有朋自遠方来不亦楽乎」の句より遠友夜学校と名付けられた。之が札幌夜学校の事情である（『新渡戸稲造全集』別館教文館，1987 年，88-9 頁）。

「遠友夜学校」が 1894 年 1 月，札幌に開学したことを告げている。これは 1 人の米国夫人の篤志によって開校したものである。この夫人はメアリーの父に引き取られて育てられ，終生，エルキントン家の温かな愛の家庭で過ごした。そして天へと召されるとき，彼女の遺産の一部を札幌に暮らすメアリーに贈りたいと遺言した（同書，88 頁）。そしてメアリーはこの遺産を稲造に譲り，稲造が以前より望んでいた「夜学校」の開設に用いることを勧めたのである。

しかして，設立された「遠友夜学校」で展開される教育の様子は先の半沢の文章より知られる。

> 設立当時は校舎と雖も渺たる一小屋に過ぎず，付近の小童を蒐めて一週二回希望する学科を教へたが，間もなく毎夜となり，教師は主として博士の教ふる札幌農学校生徒有志が献身的に是に当り，普通学の外，看護法，礼式，裁縫，編物等の実用学科に重きを置き，更に国民として恥ずかしからぬ趣味と常識と品性の陶冶に力を注ぎ，毎日曜日には修身講話をなすを常として居たが，博士自らも縷々この講壇に立って講話をせられ，自らその指導に当られた。（中略）夜学校は単なる貧民児童の教育のみならず当時札幌の貧民街に位置して居たために，或は消毒薬を配布する等[した]（同書，89 頁）。

札幌の地に開校された「遠友夜学校」，学ぶ機会からはじきだされた子どもたちへの教育と，「貧民街」での衛生も重視する「セツルメント事業」が具体的に実施されだした 1894 年以降の日本は「日清戦争」（1894-5 年）で勝利し，その勝利に湧き立ち，それとともに，国内に膨張主義，富国強兵を

賛同する機運が強まっていく時期でもあった。こうした機運は「貧しさ，弱さ，小ささ」などを表わす事象を無視し，それらを人々の関心の外へと追いやる動きとなる可能性を保有していた。「人心の改良，社会の改良」に一貫して取り組む羽仁吉一（もと子と，1901 年 1 月結婚）はかかる風潮が人々の「利欲」を煽り，人々を「浮薄なる生活」に陥れ，人々を「財利の奴婢」と化す社会を胚胎させると憂いた（拙著「羽仁もと子，吉一論」（『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』所収）新教出版社，2001 年，220-1 頁）。さらに，「戦争の勝利」は人々に「金」を「幸福」「品位」と思わせ，「不身持」でも「金さえあれば，尊敬される」機運を生み出したと指摘した(羽仁吉一著『我が愛する生活』自由学園出版局，1985 年，104-5 頁）[1)]。

札幌農学校生徒の奉仕をも得て運営展開される「貧民児童」や「晩学者」を対象とする「遠友夜学校」に表わされる「人格の陶冶」「奉仕」「犠牲」などは「財利の奴婢」と化しだした日本の趨勢と対立するものであった。しかし，「自由と解放」を示し，この世を生きたイエスの弟子たちの赴くところはやはり「苦悩と悲しみ」がつまった「光が当たらない闇」の所であった。「いのちの源」である「創造の神」にすべての「いのち」が創られ，この世に誕生したと捉える彼らは，この世にあるどの「いのち」一つも無視され，踏みにじられてよい存在ではなかった。この世にある「いのち」はひとつたりとも不要と見なせない，「かけがえのないいのち」なのだと捉えていた。

稲造たちが痛苦と悲哀の「世界」に身を寄せようとするのはクエーカーの教え，実践とイエス・キリストの言行，宣教活動に捕えらえていたからであろう。稲造を「慈愛のふかいおじいさま」と呼べる交わりをもっていた精神科医，神谷美恵子は稲造の信仰の土台であったクエーカーの実践活動を自著に簡潔に記している。

> [クエーカーとは]キリスト教の極左派ともいえる一派で，霊感を感じるあまりふるえるところからクエーカー（ふるえる人）という別名がついた。（中略）この地味な宗旨は現在[十七世紀の初め英国のジョージ・フォックスという人が創設]に至るまで連綿とつづき，アメリカ並びに世界各地に広がり，日本にも来ている。クエーカー教徒は質素勤勉を旨としているから，自然富を蓄積し，その財力で社会福祉事業，教育事業，牢獄や精神病院の改革など数々の仕事をやってきた。徹底した平和主義で，戦時には良心的兵役拒否をして肉体労働に服し，また交戦国双方の困窮者に助けの手を伸ばしてきた（神谷美恵子著『神谷美恵子著作集 9（遍歴）』みすず書房，1980 年，102 頁）。

遠益が天へと召されたという「悲痛」を通して，稲造自身，「悲哀が人生宇宙に満ち」（『新渡戸稲造全集』第 10 巻教文館，1969 年，65 頁）ていることを痛切に知らされた。しかも，その「悲哀」は人間にとって無意味，不要なものでなく，人間に生き方を教え，希望と勇気と信頼をももたらす有意義な機会（kairos）になりうることを探ろうとしていた。キリスト者である新渡戸は「悲哀」体験を通して，自らの魂を養い，アバ父なる神とキリストとの霊的な交わりを深め，自己を潔め(purification)，謙遜・誠実・友愛を身におびる存在へと成長させられていくことを知った。そのこ

とを随想「悲哀の用」（1906 年）で，次のように表している。

> 蓋し天意は，凡ての生者が，其霊性を完うするを得んが為に，此神恵[悲哀]を味ふべきを欲するものなり。悲哀は唇に苦くして，霊魂の良薬なり。悲哀の杯を飲むこと無き者は，人生の意義に通ぜず（『新渡戸稲造全集』第 5 巻教文館，1984 年，83 頁）。

「悲哀と苦悩にまみれた社会世界」にキリストの光を届けようとするクエーカー，新渡戸にとって，1894 年 1 月，遠友夜学校[2)]を札幌に開学し，教え子たちの支援をも得て教育活動を行うとの決意は稲造の内から生まれるべくして起こったと考えることは誤りでないだろう。

このように，社会の暗闇，片隅にキリストの愛の光をとどけようとする活動へと馳せさせたのは当然クエーカーとの接触，メアリーとの結婚生活，また，最愛の長男の死などによるものだっただろうが，そのほかに，彼の幼年時代から傍にあり，育て，導いてくれた祖父新渡戸傳（つとう）の生き方に大きく感化されたことも否定することはできない。南部藩士であった祖父傳は南部藩で生活する貧しい庶民を救おうとして荒蕪地三本木原の開拓事業に尽力していた。そして稲造は傳のこの藩の底辺に生き，藩を支える人々の「救済事業」に自らも連なることを幼き日より望み，学んでいた（佐藤全弘著『新渡戸稲造の信仰と理想』教文館，1985 年，15-7 頁，『新渡戸稲造全集』第 22 巻教文館，1986 年，274 頁）。「悲哀の神の子」イエス・キリストへの追従は痛苦・悲哀・辺境への世界へと一層目を向けさせるとともに，イエスの「苦難の十字架への道」を選び，その「道」を歩むことでもあった。

3. 終わりにかえてー月と萩ー

新渡戸稲造研究の発展に大きく寄与した研究者に佐藤全弘氏がいる。佐藤氏の新渡戸への研究はあとに続く者たちに多くの示唆を与えてくれる。その中で，氏が稲造の栄達について記載したものがある。稲造は国際連盟事務局次長，第一高等学校校長，東京帝国大学教授，東京女子大学長などの要職を歴任し，また，貴族院議員であった。「輝かしい経歴」の持ち主であった。しかし，それらの「栄誉」は「向こうから稲造を追いかけてきた」ものだと記し，彼の関心のあるところは「貧しい人，悩める人，社会の底辺に生きて社会を支えている人たち」に向けられていたと教えてくれる（佐藤全弘著『新渡戸稲造の信仰と理想』，201 頁）。「栄達」と「貧しく，弱く，小さく生きる人たちへの愛の活動」とはそぐわないかのように思わせる「近代化」に走る日本，強大，膨張，物質優先の歩みを掲げ，奨励する時代のもとで，稲造は日々の営みをおこなった。

稲造は花では，萩を特愛し，また，小さな庭の雑草の白露に映る月に心を寄せた。そして西行の『山家集』にあげられた歌に自らの生き方を重ねていた。

> わずかなる庭の小草の白露を
> もとめて宿る秋の夜の月

日々の苦悩と悲哀を一杯背負いながら，誠実に生きる庶民の小さな庭にはえる雑草にできた白露に夜空で煌々と輝くその月が宿っている。太陽の光を受けて明るく輝く月は，また，人々の生活の営みの真っただ中におりて，ささやかながらも，そこで暮らす人々を照らしている。これはキリストの光を受け，キリストにならって生きようとする新渡戸の心のあり方を象徴するかのような内容をもつ歌である。そんな彼が数々の花の中で，萩を特愛したのも理解できる。彼は「萩にふさわしい場所(Hagi’s Rightful Place)」という文章を書いている。「花の王国にあって，ハギはつつましく，落ち着きふかく，明らかに心足りて，もっとも低い位を受ける。いともつつましく萩は，繁る緑葉の間にあってはほとんど眼につかない。いとも落ち着きふかく，萩がその貞潔な飾り気なき装いを見せるとき，その崇拝者は，ただ溜息をもらすばかりである」（『新渡戸稲造全集』第 16 巻教文館，1969 年，162 頁，『新渡戸稲造全集』第 20 巻教文館，1985 年，151 頁）。萩は繁る緑の葉や木々の間からそっと顔をだし，小さな蝶やアリや蜂などを養っている（佐藤全弘著『新渡戸稲造の信仰と思想』，212-3 頁）。「小さな存在や世界」に強く心寄せつづける稲造らしい萩愛好の文である。

彼のこの世での「輝かしい活躍」の底に信仰者稲造の姿勢，「悲哀のキリスト」に従い，「光の子」として「世の片隅」にキリストの光をとどけ，「小さきもの」とともにこの世の旅をし，「小さきもの」に幸せが訪れることを祈念し続けた。クエーカーとの出会い，数々の悲しみの体験 [3]，祖父傳たちの生き方などが彼を育てつづけ，悲しむ処に愛を伝え，戦いのある処に平和をもたらそうとする言行となっていった。「悲哀のキリスト」との交わりは稲造の精神，他者への愛を豊かに育み，彼の活動，著書は多くの人々に生きる上での示唆を与えるものとなっていったことが了解できる。

注

1）これは 1908(明治 41)年 12 月に発行された『青年之友』に掲載された「理想の家庭」から引用したものである。
2）遠友夜学校は 1894（明治 27）年に札幌に開設し，稲造が病気で札幌農学校を辞した（1898 年）後も，教え子たち（ここには，作家有島武郎もいた）の奉仕で，文部省から閉鎖を求められた 1943（昭和 18）年まで続いた。
3）「名を高く輝かしてほしい」と稲造に期待する母，新渡戸せきは 1880（明治 13）年 7 月亡くなった。母と別れたのは 1871 年であった。東京へ遊学するためであった。そののち，彼は東京外国語学校，札幌農学校へとすすんだ。そして 1880 年，札幌農学校 3 学年の休暇の折に，9 年ぶりに盛岡の母を訪ねた。しかし，母を訪ねるこの帰省は悲哀にとむものであった。彼が母を訪ねた日の前日，母の葬儀は既に終わっていた。彼は母の死を通して，人間のいのちのはかなさを痛切に知らされた。